



南葵音楽文庫ミニレクチャー

ベルリンの頼貞

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

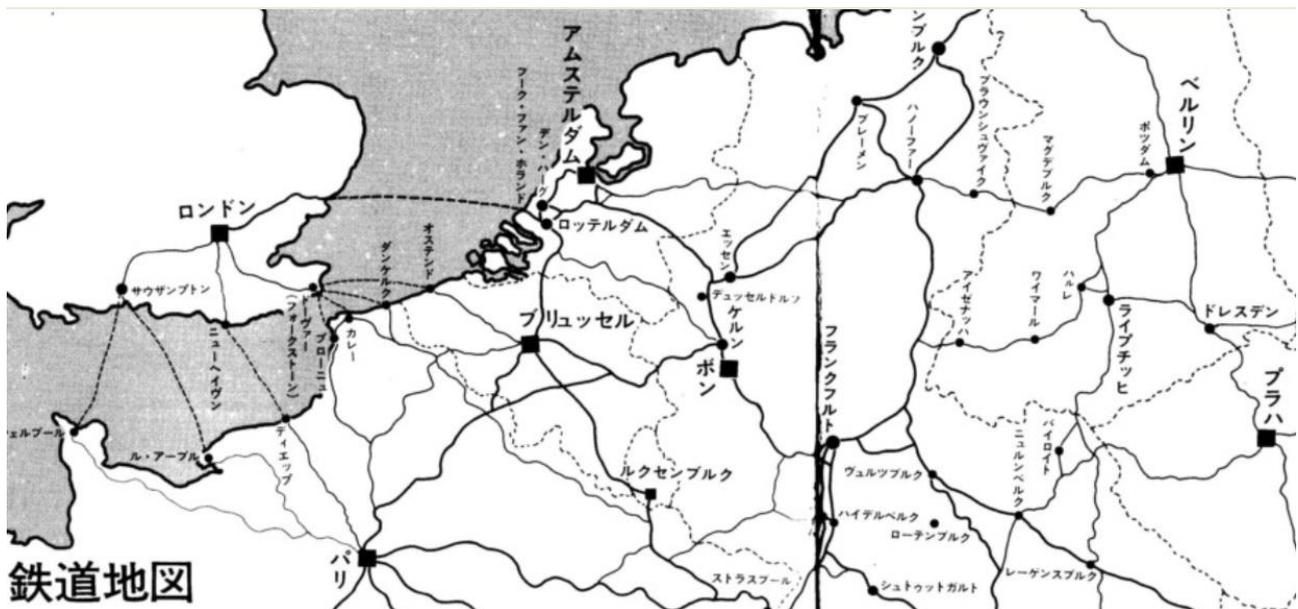
泉 健

2019年5月25日

和歌山県立図書館 南葵音楽文庫閲覧室

徳川頼貞(1892-1954)は、21歳の時から8年毎に都合3回ベルリンを訪れています。第1回目の21歳の時(1913年/大正2)は、列車に乗って通過したのみでしたが、2回目(1921年/大正10)と3回目(1929年/昭和4)には、様々な音楽を体験しています。

第1回目の1913年は、第一次世界大戦(1914-1918)開始の前年という緊迫した年でした。頼貞はケンブリッジ大学への留学のために、シベリア鉄道を利用してロンドンに向かったのですが、この時は列車の窓からベルリンを見たのみでした。自伝の『薈庭楽話』には、ベルリンからロンドンへの詳しい経路が書かれていないのですが、遺稿集の『頼貞隨想』によれば、列車でケルンまで行き、そこからライン川を船で下り、オランダのオステンドから外輪式の汽船でイギリスのドーヴァーに渡ったということです。



第2回目と第3回目の訪問は、第一次世界大戦後のヴァイマル共和国時代で、この時期のベルリンは政治的にも経済的にも大変不安定な狂乱の時代でした。しかし同時にまた、戦死者1600万人、戦傷者2000万人という悲惨な体験や、1920年代のロシア・アヴァンギャルドの影響などもあり(当時ベルリンには約5万人のロシア人が住んでいました)、ルネサンス以来の様々な芸術規範が崩壊し、ベルリンはまさにモダン・カルチャーの実験場といった観を呈していました。調性・機能と声崩壊後の12音音楽もその一つです。またフランスまで視野に入れば、パリでは遠近法崩壊後のキュビズムが展開しています。

1919-1923年は、左右の政治的革命や反乱の中で議会制民主主義をかううじて維持したものの、1923年には天文学的なインフレが起こるといった危機の連続の時代でした。シエーンベルク,A.が、12音音

楽の技法による最初の作品である「5つのピアノ曲」(1920-1923)の終曲(Op.23-5)を作曲したのが、ちょうどこの時期でした。頼貞は29歳の1921年にジーモン夫人を訪問し、彼女の自宅でベートーヴェンのピアノ・トリオ Nr.7 B; Op.97「大公トリオ」、バッハ,J.S.の「トッカータとフーガ」(おそらく E; BWV.566ではなく d; BWV.565と思われる)、ドヴォルザークのピアノ・トリオ Nr.4 e; Op.90「ドゥムキー」を聴いています。

天文学的インフレ→第一次世界大戦前 1ドル=4.2 マルク (1920年頃の1ドル=今の600円)

1922年 9月	1ドル =	1,460 マルク
1923年 2月 1日	1ドル =	48,000 マルク
1923年 10月 4日	1ドル =	440,000,000 マルク (4億4千)
1923年 10月 23日	1ドル =	56,000,000,000 マルク (560億)
1923年 11月 8日	1ドル =	630,000,000,000 マルク (6300億)
1923年 11月 20日	1ドル =	4,200,000,000,000 マルク (4兆2000億)
1923年 11月 15日	レンテンマルク発行でインフレ収拾 (Rente は地代の意・擬制通貨)	

1924-1929年は、アメリカ資本の投下により経済復興が幾分進展し、国際連盟への加入なども行われた相対的安定期でした。頼貞は37歳の1929年秋に、3度目のベルリン訪問をしています。当時ベルリンには次の3つの主要なオペラ・ハウスがありました。1.リンデン・オーパー＝国立歌劇場 Staatsoper Berlin、2.クロル・オーパー-Krolloper、3.シャルロッテンブルク・オーパー＝獨逸歌劇場 Deutsche Oper Berlinです。この時はリンデン・オーパーで、モーツァルト,W.A.の「後宮よりの誘拐」K.384を観ています。

そしてその後ベルリンを離れて南に移動し、ヴァイマル、アイゼナハにも行きました。ヴァイマルではゲーテ、シラー、リスト由来の場所を訪ね、さらに興味深いことに哲学者ニーチェの妹エリーザベトにも面会し、兄の生前の様子を聞いています。またアイゼナハではヴァーグナー博物館(ロイター・ヴィラ)を訪ねた後、ヴァルトブルク城に登りました。ここではタンホイザーの装束を着けた6人のトランペット奏者に、同オペラ第2幕第4場の入場の行進曲の演奏で迎えられています(下左の写真)。

これが10月中旬でしたが、その10日余り後の24日には、ニューヨークでウォール街の株が暴落し、世界大恐慌が始まりました。これをきっかけとして、ドイツでも失業者が増大し、1930-1933年にかけて次第にナチスの勢力が増大していき、ついに第二次世界大戦へと時代は流れていったのです。



ヴァルトブルク城の頼貞夫妻
『薈庭楽話』私家版 p.335



20世紀前半には伝説的な大指揮者たちが輩出した。上図は1929年にベルリンを訪れたアルトゥーロ・トスカニーニを囲んだドイツの指揮者たち。左からブルーノ・ワルター、トスカニーニ、エーリヒ・クライバー、オットー・クレンペラー、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー。